
ToLOVERmakers ~ 恋とハプニングは紙一重 ~

ハーレム至上主義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T O L O V E る m a k e r s 恋とハプニングは紙一重

【Nコード】

N 6 1 2 1 Y

【作者名】

ハーレム至上主義

【あらすじ】

オリキャラ主人公のT O L O V E るストーリー。

ヒロイン多数。原作主人公も登場します。

オリ主とヒロイン達のハーレム物語。

原作主とオリキャラのカップリングもあります。苦手な方にはオススメしません。

内容は基本的に原作にそう形です。

T A K E 1

信号機、車のライト、部屋の明かり、街灯。
様々な光が散りばめられた大都会。

その中の高層ビルの屋上にスーツに身を包みサングラスをかけた二人の男と、一風変わった服装をした少女が対峙するように立っていた。

「さあ、鬼ごっこも終わりです」

「我々と共に来て頂きましょう」

「……………」

爽やかな日の光がカーテンの隙間から覗く朝。
小鳥のさえずりが、少しずつ夢から現実へと目覚めさせる。

ピンポン…

追い討ちをかけるように鳴り響くインターホン。

早く起きないと…。

頭ではわかっていても、身体が言うことを聞かず、羽毛布団の暖さがさらに行動を妨げる。

暫く布団の中で怠惰の感情と戦っていると、部屋のドアが開いた。どうやら援軍が来たようだ。

「もう、悠兄！？　いつまで寝てるの？」

少し大きめの声だが決して耳障りではなく、むしろ未だ覚醒していない脳に甘く響くソプラノボイス。

この声を聞くと、自然と瞼が開く。

起きたたてで視界がぼんやりとしていたので、瞬きを何度か繰り返し目の前をはっきりと認識する。

視界がはつきりしたところで最初に飛び込んできたのは、若干茶色がかった大きな二つの瞳。

こちらの顔をジッと見つめている。

「おはよー！悠兄！」

「おはようございます、美柑さん」

頭のテッペンをちょこんと縛り、背中まで伸びる艶のある髪をなびかせているこの少女。

名前は結城 美柑。

隣の家に住んでいる親友の妹で、まだ小学校五年生ながら、料理、洗濯など家事全般を卒無くこなす、しっかり者の女の子。

そんな美柑さんに毎日と言っても過言ではない程、朝起こしてもらっている情けないオレ。

名前は速水 悠。

この四月から晴れて高校生となった、ごく普通の男の子だ。

何故敬語かって？

昔から女性に対しては敬語だったので、癖付いただけですよ。

「もう、いくら呼んでも返事しないんだら」

ムウッと頬を膨らましてジトツとこちらのを見てくる美柑さん。

「すみません。いつまで経っても朝は弱くて…」

むくりと起き上がり、ベッドに座る。

オレは極端に朝が弱いので、ほつとくと昼まで眠り続けている。

そんなオレがあまり寝坊をしないのは、美柑さんが毎朝嫌な顔一つせずに起こしにきてくれるおかげなのだ。

感謝しても足りないくらい世話になっている。

「朝ご飯できてるから、早く来てね」

「いつもすみません…」

ペコつと頭を下げる。

どうにも申し訳ない気持ちになって、いつも謝っている。

「もう、それは言わない約束でしょー!」

少し顔をムツとさせ、オレの顔の前に人差し指をビシッと立てる美柑さん。

「私がしてあげただけなんだから、悠兄は気にしないでーの! わかった?」

美柑さんはその立てた人差し指でオレの鼻先をツンツと弾いた。

その行為に何だか恥ずかしくなってしまう、照れ隠しのために頬をかき笑いながら答える。

「はい、ありがとうございます」

「うむ、よろしい」

その答えに満足したのか、美柑さんはニコツと微笑んだ。

その可愛さに思わず見惚れてしまう。

小学生相手に何をときめいてるんだオレは……

疑心暗鬼に陥っていると、先行くね、と言って微笑みながら美柑さんは部屋を出た。

これ以上、美柑さんを待たせる訳にはいかないので、のそのそと着替え始めた。

T A K E 2

着替えを終え、学校へ行く準備もできたので、荷物を持って家を出る。

自分の家の玄関を出て、またすぐに隣の家の玄関をくぐる。

そしてインターホンも鳴らさずにドアを開ける。

「お邪魔します」

一言そう言って、脱いだ靴を揃えて廊下を進み、左手にある扉を開く。

始めに見えたのは窓際に置かれたテレビ。その前に敷かれたカーペットのの上に少し大きめのテーブルとソファ。

ホコリーつ落ちてなさそうな、綺麗に掃除されたリビング。

これも美柑さんが全てやったものだろう。

そのリビングに隣接されている。ダイニングとキッチン。

そこに置かれたテーブルに、こちらに背を向けて一人の男が座っていた。

「おはよ、リト」

「ん？ おお、悠。おはよう」

口をモゴモゴさせながら挨拶に答えたこの男。

名前は結城 リト。

この結城家の長男で美柑さんの実兄。
近年稀に見る純情ボーイで、グラビアの水着写真を見て卒倒するほど。

でも正義感が強く、いざという時にはやる男。

オレの幼なじみで親友でもある。

「お前相変わらず朝弱いんだな」

ご飯を口に運びながら、苦笑いで言うリト。

「こればかりは、どうしようもないよ」

はあっと溜息をつきながら、リトの向かい側の席に腰を降ろした。

「悠兄も、ご飯いる？」

少し大きめの箱を持った美柑さんがダイニングに入ってきた。
どうやら洗濯物を干していたようだ。

「あ、頂きます」

そう答え、目の前に置かれた食事を目を向ける。

焼きジャケに卵焼き、味噌汁にキャベツの千切りと、これぞ和食！
と言ったような料理が並べられていた。

卵焼きを一つ箸に取って口へ運ぶ。

その食感まるで空気を食べているかのように軽く、味も少し甘めでオレ好み。

「うま〜い」

自然と、そう口から洩らしていた。

「卵焼きくらいで大袈裟なんだから。はい、ご飯」

少し呆れた様な声を出しながら、ほくほくと湯気が出ているご飯が入った茶碗を置く美柑さん。

けれどもその顔は若干緩んでいた。

「それじゃあ私、今日、日直だからもう行くね。食べ終わった食器は流しに入れといて」

「おー」

「わかりました」

例え自分が忙しくても、ちゃんと家事をこなす美柑さん。

やっぱり感謝しても足りないな。

ふと横を見ると、美柑さんが隣に立ってジッとこちらを見ていた。

ああ…あれか。

その意味を理解したオレは、すぐに行動に移す。

「気をつけて、いつてらっしゃい」

そう言つて、美柑さんの頭を二度三度撫でる。

すると美柑さんは満面の笑顔になり

「うん！ 行つてきます！」

と言つて、元気よく出て行った。

当たり前のことになったこの行為。

美柑さんは学校に行く前や寝る前に、必ずオレのそばにやってきて、頭を撫でられるのを待つ。

今では言わずともわかるこのやり取りだが、最初のころは美柑さんの意図がわからず、よく機嫌を損ねたものだ。

リトはこの場面に見慣れたのか、我関せずといった感じで茶を啜っていた。

「そろそろ行くか」

暫くゆっくりした後、学校へ行く時間になったのを見て、リトが腰を上げた。

オレもそれに続くようにして、鞆を持って席を立つ。

二人で家を出て、リトが鍵をかけたのを確認して、ゆっくりと学校へと向かう。

今の季節は春。

空は澄み切った青空で、太陽の光がポカポカと心地よい。

そんな風景に、心も暖かくなる。

いつまでも、こんな風に静かな生活が続けばいい。
そう思った。

だが、この平穏な生活が終わりを告げようとしていた。

T A K E 2 (後書き)

終わり方下手ですみません。

T A K E 3

「おはよー」

「おーすっ」

普段と何も変わらない朝。

いつも通り美柑さんに起こしてもらい、その美柑さんが作った朝ご飯を美味しく頂いたオレは、いつも通りリトと一緒に学校に向かった。

彩南高校。

それがオレ達の通う学校の名。

基本的に自由な校風で、校内ではいつも賑わいが絶えない。

中でも、この校長が一番自由な人である。

というより、ただのエロ親父。

階段下に寝そべっては下から階段を上がる女生徒のスカートを覗いたり、校長室では仕事もせず一心不乱に成人向けの雑誌を見たりとやりたい放題。

そんなやつが校長で大丈夫か、この学校…。

と、思うことも多々あるが、意外に問題児という生徒はおらず平和な学校である。

「ホント、不思議だよ」

「ん？ 何か言ったか？」

「いや、なんでも」

そんな他愛もない会話をしながら、オレとリトは校門をくぐる。

そして、少し先に見覚えのある背中を見つけた。

「おすつ、猿山」

リトが声をかける。

名前を呼ばれたそいつはクルツと振り返る。

「おす。リト、悠。」

猿山と呼ばれたこの男。

猿山 ケンイチ。

その名の通り猿みたいな顔をしている。

オレとリトとは中学時代からの悪友である。

「なあなあ、見たかよ昨日のグラビアアイドル特集！　　すげー可愛い子ばっかだったぞ！」

この通り女好きで、年中彼女募集中の万年発情野郎だ。

「み、見る訳ないだろ！ そんな番組！」

顔を真っ赤にさせて答えるリト。

グラビアアイドルという単語を聞いただけでこうなるんだから、実際に昇天するんじゃないかと心配してしまう。

「まーだそんなこと言ってんのかよ、リトお。それじゃいつまで経っても西蓮…」

「おはよう、速水くん」

リトと猿山の会話を左から右に聞き流していると、突然名前を呼ばれ振り返る。

「西蓮寺さん。おはようございます」

この人は西蓮寺 春菜さん。

リトや猿山と同じく中学校からの知り合いで、女子の中では一番親しい。

肩で揃えられた紺色がかった髪をヘアピンでとめていて、おしとやかで清楚な可愛い女の子だ。

そして…。

「おっ噂をすれば何とやらだな。リト！ 早く話しかけて来いよ！」

「そ、そんな…。いきなりは無理だつて！」

リトの中学からの思い人でもある。

「だあ！ もう！ 情けねーなあ！おーす、西蓮寺。 おはよう」

「お、おい！」

リトのモジモジした態度に我慢できなくなったのか、猿山が先に挨拶をする。リトはその後ろであたふたしている。

「猿山くん。それに、結城くんも。おはよう」

「お！おおおお、おはよう！」

リトは身体を硬直させて、噛みながらも何とか挨拶に答える。
挨拶だけでこれじゃあ、まだまだ先は長そうだ。

「あーオレ、数学の宿題やってなかったわ。てことで、悠。悪いけど写させてくれ」

突然、猿山がそんなことを言い出した。

何が、てことでのなかかわらないが、恐らくリトと西蓮寺さんを二人きりにする口実だろう。

その意図を読み取ったオレは、猿山に協力するように答える。

「ったく、自分でやれっていつも言っただろ。まあいいや。数学、一時間目だろ？ 早いとこ教室行こうぜ」

「わりわり。じゃあ、お二人さんはごゆっくり」

リトに向かってそう言つと、オレと猿山は教室に走った。

「え？ あっおい！」

後ろでリトが何か叫んでいたが、構わず走った。

「速水くん……」

T A K E 3 (後書き)

春菜の菜が奈になっていたので訂正しました。
申し訳ありません。

TAKE 4

時は過ぎ、昼休み。

結局あの後、リトは西蓮寺とロクに会話もせずに教室に入ってきたという、何ともヘタレな結果に終わった。

そして今は、待ちに待った昼食の時間。

昼食はいつもオレ、リト、猿山の三人で屋上で食べている。これは中学からの習慣みたいなものだ。

「はあっ…絶対つまらない男って思われた」

自分でもヘタレな結果に情けないと思ったのか、リトはさっきからネガティブ思考に陥っていた。

「せつかくオレと悠が気を利かせてやったのに。なあ？」

自分のおかげ、とでも言いたそうな猿山は隣に座るオレに聞いてきた。

「宿題できてなかったくせに、偉そうに言うな」

自分のことを棚に上げていう猿山を冷めた目で見る。

「まあ、それは置いて。リトお、これじゃいつまで経っても西蓮寺といい関係になんてなれねえぞ」

オレの言葉をスルーした猿山は、リトに向かって言った。

「うつせえなー…そんなこと言われなくてもわかってるよ」

痛いところを指摘されたことに少し腹が立ったのか、リトはふて腐れてしまった。

「リトはまず、女の子に慣れないとな」

それが一番の原因だ、と言うようにかつかと笑いながら言う猿山。

「それは言えてる」

オレも猿山の意見に賛成だったので、同意の意志を述べる。

「んなこと言われても」

リトはその原因を解決する術がわからないのか、困った顔をしている。

すると突然、猿山がよし！と言って立ち上がり

「オレの秘宝『巨乳アイドル特集』を特別に貸してやろう！それで問題解決だ！」

胸を張って、そんなことを言い出した。

オレとリトは何も言わず、猿山を蔑むような目で見ていた。

放課後……………

退屈な授業を終えたオレ達は帰路についていた。

リトは今朝のことをまだ引きずっているのか、終始俯き加減だ。

結城家に着き、門をくぐる。

オレの家は隣にあるのだが、そのままここに直行するのが、もう当たり前のことになっている。

玄関のドアをリトが開く。

鍵は開いているので、どうやら先に帰ってきてるようだ。

「悠兄、おかえり！」

ドアを開いた瞬間、弾丸の如くオレの胸元に美柑さんが飛び込んできた。

それをオレは難なく受け止める。

「ただいま、美柑さん」

リトのことは完全無視の美柑さん。

そのリトは、この新婚夫婦のようなやり取りには目もくれず、ふらふらと階段を上がっていった。

「…何かあったの？」

いつもと様子の違う兄を不思議に思ったのか、未だオレの腰に巻きついている美柑さんは顔を上げて上目遣いで聞いてきた。

「ええ…まあちよつと」

オレは苦笑いで答える他なかった。

それを聞いた美柑さんは、ふーん、と興味なさげに言っただけでそれ以上聞いてくることはしなかった。

「悠兄、ご飯食べてくでしょ？」

さも当然のことであるかのように聞いてくる美柑さん。

「いえ、毎日ご馳走になる訳にはいかないのです。今日は自分で作りますよ」

一応、一通りの家事はできるので料理も別に問題はないが、いつも美柑さんの厚意に甘えてしまっている。

それを聞いた美柑さんは、ジトつとした目でオレを見た。

「そっかー…今日は悠兄の好きな唐揚げにしようかと思ってたんだけど、悠兄が食べないなら仕方ないか」

唐揚げ、という単語に思わず体が反応する。

それを知ってか知らずか、美柑さんはニヤニヤしながらこちらを見ている。

何を隠そう、オレは無類の唐揚げ好き。

ただし、唐揚げなら何でもいいという訳ではなく、美柑さんの作る唐揚げが好きなのだ。

美柑さんは、どうするの？という意味の籠った目でオレを見る。

「……頂きます」

完敗。こう言うしかなかった。

それを知ってか見る柑さんは、勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

「初めからそう言えばいいのっ。ホントに悠兄は遠慮するんだからよくわかってらっしゃる。」

少し呆れ顔の美柑さんだったが、それでも満足したのかずっとニコニコと笑顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6121y/>

ToLOVEるmakers ~ 恋とハプニングは紙一重 ~

2011年11月19日18時08分発行